

第61回伝道研究会（4月24日）

「文化活動を視点においた『コロンビアの道』」

伝道研究会ではこれまで、コンゴや中南米の天理教伝道、またアメリカスの日系宗教など取り上げてきたが、現在は「天理教海外伝道における文化活動」をテーマとし、実際に海外での伝道の現場で文化活動に携わっていた人たちを招き、活動の様子や課題、また布教伝道との関わりなどについて議論を行っている。

このテーマとしては7回目となる研究会では、コロンビア出張所長である清水直太郎氏が、同出張所で展開されているさまざまな文化活動を紹介した。

はじめに、教会による文化活動の基本は、お道と地域社会の媒介の手段としての機能が主であると述べ、教祖のひながたの事例や2代真柱の文化布教に関する言説から、布教の手段としての文化活動の位置付けを確認した。その上で、コロンビア出張所が取り組んできた文化活動の歴史を振り返り、活動によって得られた地域社会からの信用や人とのつながりの大切さなど活動の意義について述べた。また、文化活動を布教拠点内で行うこと、あるいは信仰を持つ者が関わっていくことの重要性などを指摘した。さらに、鼓笛隊や空手、柔道、日本語教室、雅楽といった出張所として現在展開している活動を、画像を交えて紹介し、そうした活動が布教伝道の上にもたらす効果について言及した。（記：森）

第4回宗教文化セミナー

「多様化する『家族』のあり方に向き合う」に参加

おやさと研究所長 深谷忠一

公益財団法人日本宗教連盟主催の宗教文化セミナーが、6月5日に、東京都杉並区和田のセレニティホールで開催され、天理やまと文化会議委員の安井哲郎氏と共に参加した。

このセミナーは、「宗教は『家族』と『地域社会』を再生できるか」を総合テーマに掲げたシリーズの第3回目として「多様化する『家族』のあり方に向き合う」をテーマに掲げて開催されたものである。

当日は、まず、国学院大学副学長の石井研士氏が基調講演を行った。今の日本の3割の家庭が正月のおせち料理を作らない、神棚、仏壇が家庭からどんどん消えて行っている。東日本大震災以後「きづな」ということが盛んに言われて、以後日本社会・家庭での人間関係が濃密になることが期待されたが、3年後の現状は震災以前とほとんど変わっていない。宗教団体は、家族の構成人数の減少（人口の減少）と非宗教化という二重の「家族問題」に直面している、と各種調査を基に指摘した。

続いて、パネリストとして、金光教教務理事・財務部長の山下輝信氏が登壇して、九州の限界集落における金光教の活動について紹介。高齢者、単身者が多く、家族が成り立たなくなっている中で、地区信徒会の開催、宅祭、霊祭、また、教会行事への誘いや個別の送迎等地道な活動を通して、信仰を土台にどのような繋がりをつけ信仰心を涵養しているかを紹介した。

次に、浄土宗来迎山道往寺住職・第20世上人柏昌宏氏が登壇。柏氏は、30年間住職が不在であった寺を後継し、開かれ

たお寺を目指して本堂を改築したり、イングリッシュガーデン風永代供養墓地を作ったりして、“近くにあるが縁が遠いお寺”から、“近所の安心できるお寺”へと評価が変わった様子を報告。寺院としては、葬儀・法事等の死後に世話する寺から、生きている間のゆしみの場所になることが大事であり、そのために、ウェブサイトやSNSを活用した情報発信をして、寺院への理解を深めていく努力をしていると話した。

次いで立正佼成会布教開発部長出射優行氏が登壇。在家仏教教団として、家族の変容に応じた柔軟な取り組みを開発、推進している。その中で、特に布教の担い手の主任（女性幹部）の有業率が4割を超えている現状に対応すべく、働く主任の研究会などを実施して、女性が仕事と家庭を両立させつつ信仰活動ができる環境作りを目指していると報告。

また、同会の平日の一般的な行事の参拝者の年齢構成は60歳以上が70%強を占め、65歳以上の会員の約半数の家庭が一人暮らしか夫婦のみの所帯であるという現状がある。そこで、2015年に「生涯布教のススメ」を発表し、支教区単位で生涯布教研究会を実施（3年間で全26支教区）。具体的には、高齢者世帯の会員の見守り・友愛訪問、世代間交流、支部でのサロン活動、健康増進活動などを展開していると紹介した。

その後、渡辺雅子明治学院大学社会学部教授による3者の発表に対するコメントがあった後、5氏によるパネルディスカッションがなされた。

このセミナーにおいては、多様化する「家族」のあり方に向き合うべく、各教団・宗派が取り組んでいる具体的な活動が種々紹介されて、種々参考になる事例もあった。しかし、社会福祉活動の補完的活動の域を超えて、宗教の立場から家庭のあるべき姿を考え、現況をどう変えていくべきかの論（病の根を切る方法）の展開はこれからの問題として残されたように思われた。

南アジア・南東アジア文化と宗教学会の第6回大会で発表

堀内みどり

6月4日から7日にかけてスリランカのコロンボにあるケラニア大学で開催された南アジア・南東アジア文化と宗教学会の第6回大会（6th South and Southeast Asian Association for Culture and Religion (SSEASR), University of Kelaniya）に出席・発表した。大会テーマは「南アジア・南東アジアの歴史・文化および宗教における文化遺産（Heritage in the History, Culture and Religion of South and Southeast Asia）」で、堀内は「Varanasi: The City of Prayer and Pilgrimage（ワラーナシー：祈りと巡礼のまち）」と題して発表した。

スリランカ以外からの参加者は約60名で、オランダのA.Nugteren教授が「みやげ、思い出、記念品そして仏教大使としての菩提樹の“葉”」（The Bodhi leaf as a souvenir, a memento, a relic and an ambassador of Buddhism）と題して基調講演を行った。ブッダガヤ（インド）の菩提樹の下でブッダは大悟したとされるが、その菩提樹の葉はさまざまに加工されて売られている。菩提樹のそのハート型の葉は今なお仏教を象徴し、いわば“大使”とも考えられる、とのことだった。